

富山県福岡町

埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ

2004年3月
福岡町教育委員会

序

「文化の薫り高くふれあいのあるまち」は、福岡町が目指している町づくりの三本柱のひとつです。文化財を継承し、次世代へと譲をつなぐことは、地域文化の振興と存続を図る上で欠かすことができないものです。

現在進行中の全国的な市町村合併の動きを見ますと、過去の歴史的経緯や文化的なまとまりを考慮した枠組みをしばしば見受けることができます。こうした枠組みは、“アイデンティティ”即ち、地域の独自性を重視した動きの中で形成されているものと考えられます。そして地域の独自性を考える時、その要素のひとつとして埋蔵文化財の存在が浮かびあがってきます。

昨年度から開始した町内遺跡の詳細分布調査は、田畠を歩いて遺物を採集するという地道な作業ですが、埋蔵文化財調査の入り口にあたる大切な仕事です。この成果を反映させた高精度度の遺跡地図は、地域独自の歴史を語るとともに、文化財保護と調和のとれた開発を実施する上で大きな役割を担うものです。本書がその役割を果たすことを願うと共に、埋蔵文化財をとおした新たな地域文化の発見への一助となれば幸いです。

最後に、調査の実施にあたり御協力いただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成16年3月

福岡町教育委員会
教育長 石田 伸也

例　　言

1. 本書は福岡町教育委員会が国庫補助を受けて実施している町内遺跡詳細分布調査の2年目（2003年度）の分布調査報告である。
2. 調査は福岡町教育委員会が主体となり実施した。
3. 調査事務局は福岡町教育委員会生涯学習課に置き、文化財保護主事栗山雅夫が調査事務を担当し、教育次長佐伯邦夫が総括した。調査担当者は次のとおりである。

福岡町教育委員会 生涯学習課 文化財保護主事 栗山雅夫
4. 本書の編集・執筆・写真撮影は、福岡町教育委員会文化財保護主事栗山雅夫が担当した。
5. 本書の図版の遺物番号は実測図・写真図版ともに統一している。
6. 現地調査・資料整理・報告書作成にあたって、下記の参加を得た。

竹下真由美・横川美雪・中田郁子

7. 採集遺物及び記録資料は、福岡町教育委員会が保管している。
8. 遺物の分類については、富山県文化振興財團 宮田進一氏のご教示を得た。記して謝意を表する。

目 次

序 文

例 言

目 次

第1章 はじめに

第1節 位置と地形	1
第2節 調査に至る経緯	1
第3節 2003年度調査地区の概要	
I 地名各説	2
II これまでの遺跡調査成果	4

第2章 調査概要

第1節 調査の経過	6
第2節 調査の成果	
I 遺跡各説	7
II 小 結	12

図版目次

第1図 福岡町位置図	1
第2図 調査地区割図	3
第3図 2003年度分布調査対象地位置図	5
第4図 遺物実測図(1)	8
第5図 遺物実測図(2)	10
第6図 遺物実測図(3)	10
第7図 2003年度分布調査成果図	13
付 図 2003年度分布調査結果概要図	

写真図版

図版1 航空写真(1)(1947年撮影)	
図版2 航空写真(2)(1946年撮影)	
図版3 遺跡写真(1)	
図版4 遺跡写真(2)	
図版5 遺跡写真(3)	
図版6 遺跡写真(4)	
図版7 表採遺物 俯瞰写真(1)	
図版8 表採遺物 俯瞰写真(2)	

表 目 次

第1表 時代別採集遺物一覧	6
第2表 調査遺跡一覧	12

第1章 はじめに

第1節 位置と地形

富山県は、地理的にみると県央を南北に走る呂羽丘陵を境として東西に分割され、「呂東」「呂西」と呼ばれる地域に大別できる。福岡町は、「呂西」地域の北西部の一角を占めており、その北西部は石川県押水町と県境を接している。

58.62km²を測る町域は、平野部と丘陵・山間部に大きく分かれており、その面積比は1:4となる。南東方向に広がる平野部は、小矢部川と庄川によって形成される複合扇状地の扇端部に位置し、砺波市・高岡市・小矢部市と境を接している。また、丘陵・山間部は、東流する小矢部川によって隔てられている。丘陵部は「西山丘陵」とも呼称され、小矢部市から福岡町、そして高岡市の「ヨコ」のラインを形成している。一方、丘陵部の背後に広がる山間部は、

ほうとうさん宝達山を主峰とする能登半島の山々へと連なっており、これが「タテ」のラインといえる。

さて、小矢部川によって二分されている平野部は、その面積比はさておき、「川西」「川東」として地元では周知されており、あたかも「関東」「関西」の如き対比を示すこともしばしばある。ところで「川東」においては、扇状地扇端部という地理条件によって湧水層が高く、地下水や涌き水が豊富である。このため、現在の河川環境に整えられる以前は、小矢部川に流れ込む支流の氾濫もたびたびみられ、圃場整備事業が完了するまでは沼地の様相を呈する場所が散在していた。町の特産である菅笠や養鯉の成立にも、こうした地形的環境が大きな影響力を持っていったことは明らかである。



第1図 福岡町位置図

第2節 調査に至る経緯

福岡町における埋蔵文化財包蔵地の周知化については、昭和47年（1972）に富山県教育委員会文化課により発行された『富山県遺跡地図』、平成5年（1993）富山県埋蔵文化財センターによって発行された『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』をベースに、年々蓄積される新たなデータを書き加えるかたちでその把握に努めてきた。遺跡数の変化をみると、昭和47年で39箇所だったものが平成5年には87箇所に増加している。これに平成5年以降に新たに追加された遺跡を加えると、詳細分布調査に着手する以前には103箇所まで増加し、昨年の詳細分布調査により新たに1箇所の包蔵地を確認している。こうした遺跡の増加要因は、開発行為の増加と埋蔵文化財保護行政の充実に伴うところが大きく、開発行為と不可分の関係で実施される分布調査や試掘調査の積み重ねは、多くの新遺跡発見のきっかけとなっている。

ところで、遺跡地図は、点によって遺跡位置を表記した昭和47年段階を経て、平成5年には線により遺跡範囲を示すものに改変されている。この結果、開発に関わる遺跡の照会能力は格段に向上したが、一方で未踏査部分も多く残されており、精度の向上は長年の課題であった。昨年度より開始している詳細分布調査はこの課題に対するものであり、5年で町内全田畠の現地踏査を行なう計画である。

第3節 2003年度調査地区の概要

I 地名各説

今年度の調査対象地は旧福岡町とその南東にある旧山王村である。

このうち旧福岡町は、荒屋敷・福岡・福岡新・下養・下蓑新・大野の6地区で構成される。この地域は、当町で最も人口が集中する場所にあたり、近世には北陸道がここを横切っていた。また、現在の幹線道路である国道8号線や北陸本線福岡駅もこの地にあり、中心市街地に該当する。その規模は東西約1.7km、南北約540m、1.32km²の面積を測る。福岡町史によると、福岡に関する伝承等として以下の事柄が紹介されている。(『福岡町史』福岡町史編纂委員会; 1969)

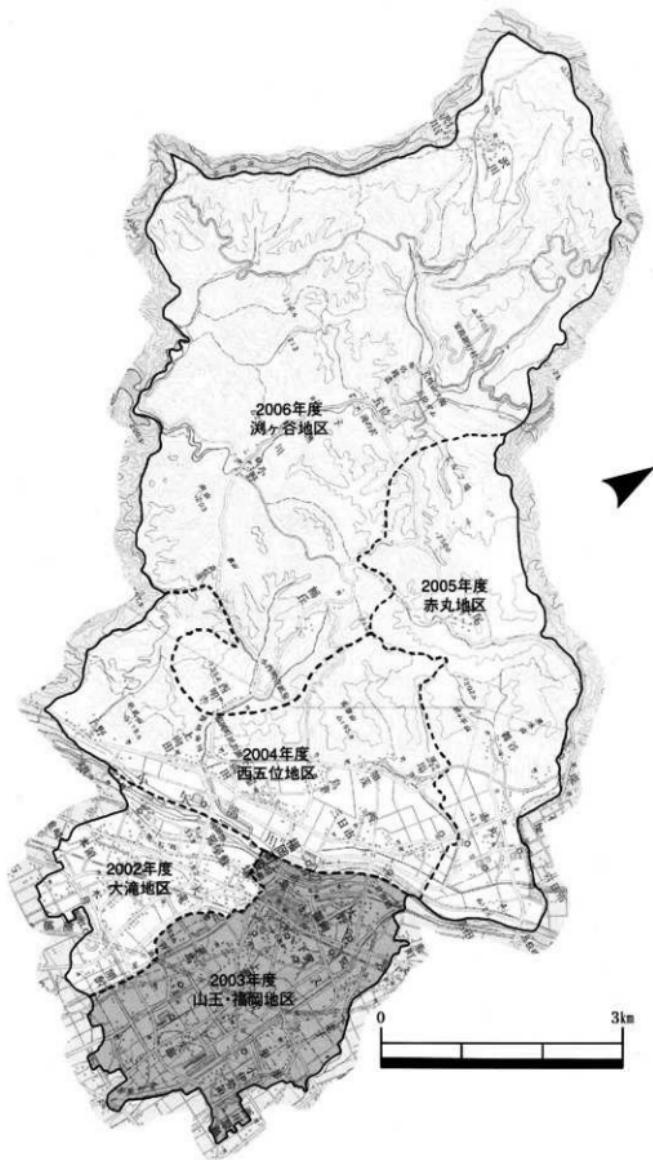
- ① 加賀の福岡(現・石川県石川郡河内村)の豪族、結城七郎四郎宗俊がこの地に移住し、その景観が旧居住地の福岡(加賀)に酷似していたために、その名を冠した。
- ② 福岡町が町の様相を呈するようになったのは、近世初頭に尾山(金沢)と関野(高岡)を結ぶ北陸街道(高岡街道)が福岡を通るようになってからである。
- ③ 承応年間(1652~1654)に町立を願い出て、福岡新町と名付けられた。また、福岡町と公称するようになったのは、明治17年(1884)に旧四十万村と旧稗島村が合村してからである。
- ④ 万葉集巻十六、越中国歌四首には、「大野路は繁道森徑しげくとも 箕し通はば道は広けむ」の歌があり、あたり一帯は見渡す限り広々とした野原で沼地が多く、その中に福岡があった。但し、この「大野路」の所在については、現在の福岡町大野地内にあったとする説と小矢部川左岸地域の旧西五位にあったとする説がある。

近年、土蔵内器物の一括寄贈を受けた福岡町中心部の商家の資料をみると、福岡新町の発展時期については、18世紀前半に下る可能性も考えられる(『壽原家寄贈品目録』福岡町教育委員会; 2001)。もちろん町立の時期はそれ以前ということになるから、福岡新町自体の成立は17世紀中頃であっても問題はなく、町立成立から若干の時期をおいて町が勃興したことが推測される。

一方、旧山王村は、下老子・一步二歩・西川原島・小伊勢領・小矢岡新・矢部・江尻・上養・蓑島の9村で構成される。山王の名前の由来は、村内を流れる山王川(荒又川)によるものと考えられている。旧大滝村(昨年度調査)と旧山王村は、昭和15年(1940)に旧福岡町との町村合併を行ない、さらに昭和29年(1954)、来年度以降の調査対象地である旧西五位村・旧赤丸村・旧五位山村と合併し、現在の福岡町となっている。旧山王村の村域は、東西約2.4km、南北約3.5km、5.8km²の面積を測る。

旧山王村の集落に関する地名伝承等には、以下のようなものがある。

- ① 江尻は荒又川と岸渡川の2つの川が氾濫を繰り返していた頃、沼地(江)の尻にあったためその名がついた。
- ② この辺一帯の川岸に「蓑」を作る菅草が生い茂っており、蓑を製造する島=村であるという意味で蓑島と呼ばれるようになった。また、「和名類聚抄」に「三野」の地名があって、「越中志微」はこれを蓑島・上蓑・下蓑であるとしている。
- ③ 矢部の起源は明らかでない。しかし、旧大滝村の木舟城が被災した天正13年の大地震の際、今も村内に残る日尾神社一帯が泥沼に沈んだ。ところが、神社の森だけは、浮の宮として残った。



第2図 調査地区割図 (1/60,000)

- ④ 一步二歩は、もともと別々の村であり、元和5年（1619）段階では一步村と二歩村であったものが、正保3年（1646）には一步二歩村となっている。ここにも天正大地震の影響が及び、地震に伴う大洪水によって水没したものが、水が引く際に神社付近から一步、二歩と地面が姿を現わしたことから、その名がついたとされている。また、南北朝期に宗良親王が村内にあった砦に入る今一步、二歩手前で亡くなられたためというもの。さらに、宮をつくる時に必要な土地を、一步の宮には一步（一坪）、二歩の宮には二歩（二坪）ずつ人々が出し合ったことによるなど、多彩な地名起源伝承が残されている。
- ⑤ 下老子の名称については、八丈の翁という白髪の老人の子が村を開拓したことによるとされている。また、小字「上田」には、昔「^{あが}老子」^{かねいじ}が存在し、地震で陥没して集落が四散したと伝えられている。また、「追子」「負子」と記すものがある。「和名類聚抄」には「^き意非」郷が記されており、それをこの地に比定する説もみられる。
- ⑥ 小伊勢領の村名は、昔、伊勢神宮の神領であったことに由来するとされ、近隣にある伊勢領村にも関係するものとされている。
- ⑦ 西川原島は、横越村の西にある荒又川の氾濫原を開拓したことによるとされている。また、明暦（1655～1657）年間頃、西川原村と野兵衛島が合併して成立したという記録もある。この地域には、木舟城に大きな被害を与えた天正大地震に伴うものと考えられる伝承がいくつか残されており、昨年の調査地である旧大滝村とこの村が地理的にみても、歴史的にみても繋がりを有する場所であることが理解される。

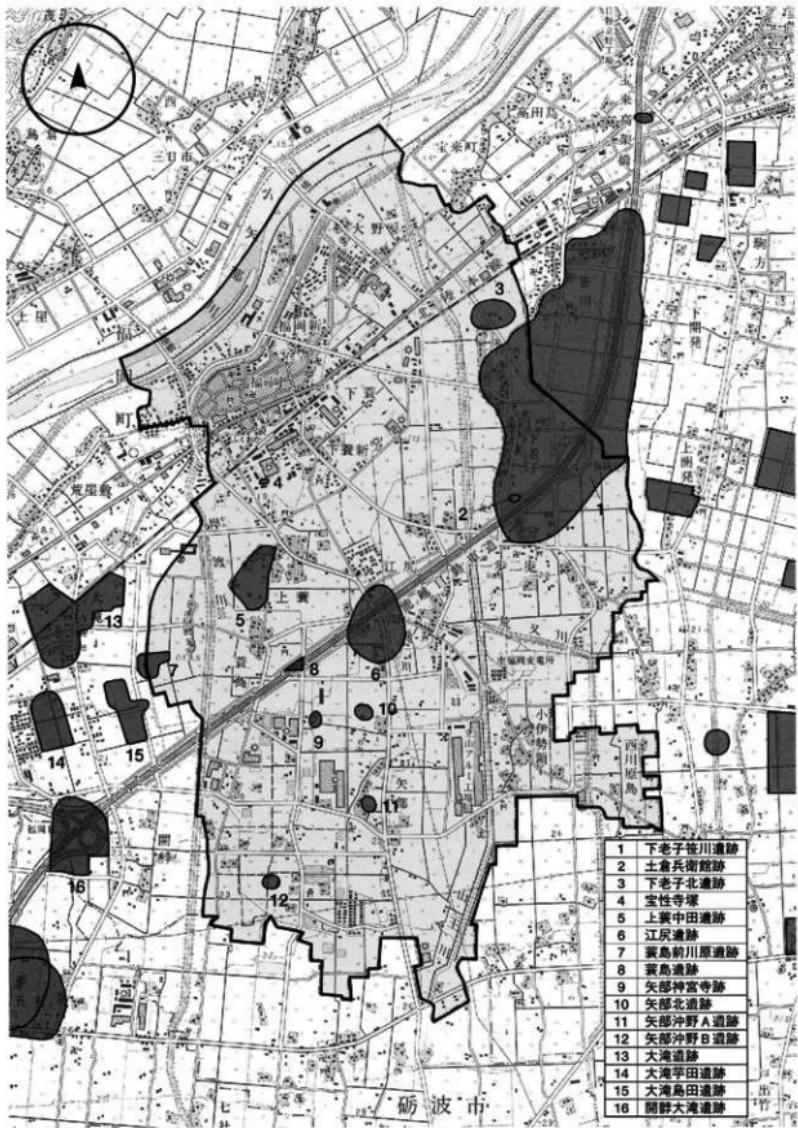
II これまでの遺跡調査成果

福岡地区でこれまでに確認されている周知の埋蔵文化財包蔵地は、「宝性寺塚」の1箇所だけである。また、これまでに本調査を実施した事例はない。これは、調査対象地の多くが古い段階から市街地化し、新たな開発用地となる田畠が限られた面積であることも影響しているようである。

一方、山王地区は高岡市のベッドタウンと化す事などにより福岡町でも最も人口増加率が高い。このことは、開発行為の増加をもたらしており、能越自動車道の建設に関連して「糞島遺跡」「江尻遺跡」「下老子笹川遺跡」の発掘調査がされている。このうち糞島遺跡と江尻遺跡については報告書が刊行されており、その詳細を知ることができる（『江尻遺跡・糞島遺跡発掘調査報告』富文振；2003）。また、平成13年には町教委によって江尻遺跡の発掘調査が実施されており、弥生時代の遺物が出土している（『富山县福岡町江尻遺跡発掘調査報告』栗山；2002）。下老子笹川遺跡の調査報告については現在整理中であり、正式な報告を待たなければならないが、平成7年度～10年度の概報が刊行されている（『埋蔵文化財調査概要』富文振；1996～1999）。町教委による発掘調査も平成9年度に実施されており、調査の結果天王山式系統の土器を主体とする遺物が出土している（『下老子笹川遺跡発掘調査報告書』栗山；1998）。

山王地区における分布調査前の周知の埋蔵文化財包蔵地は11箇所であるが、これらの遺跡発見とその内容については、能越道の建設が大きな契機となっている。

発掘の成果を考慮すると、当地域には縄文時代晩期の集落遺跡が確認されており、この地への居住がこれまで考えていたよりも古い時期に遡ることが明らかとなっている。また、周溝建物を伴う弥生集落からは、東北地方に出自を持つ土器が出土しており、交易や文化交流についても注目される。



第3図 2003年度 分布調査対象地位置図 (1/25,000)

第2章 調査概要

第1節 調査の経過

分布調査は昨年度に統いて、調査員と調査補助員の2名により耕作期間を除いて実施した。現地踏査の手法についても、下記のとおり昨年度の調査スタイルを原則としている。

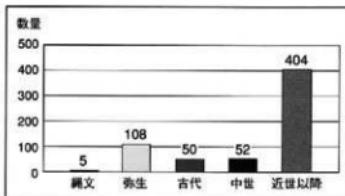
- ①田畠の区画の大小によらず、1枚の田畠を遺物整理の最小単位とする。
- ②基本動線は、1区画の田畠において外縁部分を1周する。但し、過去の圃場整備等により通常の区画数枚分の大きさを持つような場所では、必要に応じて縦断するラインを増やす。
- ③遺物の収集は、上記の1区画分の田畠とする。
- ④これまでに分布調査を実施している場所については、過去のデータを用いる。

この調査方針は、調査者が多数になることによって発生する遺物採集精度の誤差を排除することに主眼をおいている。踏査動線については、田畠1区画内をくまなく歩くことが最高精度を誇るであろうが、そのためには多くの調査員を投入するか、もしくは長期の時間を費やす必要がある。しかしながら、多くの調査員を投入すれば投入するほど個人レベルでの技術的な採集誤差が発生し、調査費の高騰も無視することができない。一方、分布調査に長時間を費やすことは、耕作期間やその他の調査事業スケジュールを考えると困難である。

ところで、現地の状況をみれば、田起こしを実施していない場所も一定数みられるが、他方で、外縁に排水のための溝を設けているものも多くみられる。分布調査における遺物の採集区域が田畠の外縁に集まる傾向も考慮するなら、排水溝を設けるために掘り起こした土を確認することが効率的であるといえよう。さらに、埋蔵文化財業務を担当する調査員と調査補助員の2名で現地踏査を行うことで、前述した採集精度の誤差を低く抑えることができ、より効果的な調査を実施できるという利点がある。

さて、現地踏査は実働12日を費した。遺物は、旧石器・縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世以降の7種に分類して整理を行なった。調査の結果、周知の埋蔵文化財包蔵地として扱う跡跡は、中世までの遺物を採集した場所を第1次候補地とした。次にその場所を地図にプロットし、遺物のまとまりや旧地形の状況を反映させて、跡跡の範囲を絞り込んでいる。

分布調査の結果、遺物が採集された田畠は314枚を数える。内訳は縄文が5点、弥生が108点、古代50点、中世52点、近世以降が404点で総数619点である。但し、弥生土器と古墳・古代の土師器の分類については、摩滅した小破片がほとんどで、図化することも困難なものであった。よって、素焼の土器については、厳密な時期の特定は不可能であったことを断っておく。この手の土器の時期設定については、同時に採集された遺物の年代も勘案しながら、齟齬をきたさない時期とするよう努めた。数量比をみれば、近世以降以外では弥生時代の遺物が多いが、これは当町でも指折りの面積規模と内容を誇る下老子萱川跡跡が調査対象地となっているためである。



第1表 時代別採集遺物一覧

第2節 調査の成果

I 遺跡名説

①宝性寺塚（遺跡番号422071）：変更無

本遺跡は町の指定史跡「宝性寺跡」として知られている。現在、その場所は工場敷地内的一角にあり、1.5m程の高さを持つ塚状の高まりとして残されている。その周囲はコンクリートブロックによって土留めされ、比較的大きな杉が育っている。また、塚の頂上には、創建から17世住職乗覚までの山来を記した石碑が建っている。これは、嘉永5年（1852）に建てられたもので、その碑文は現高岡市石堤にある長光寺18世住職の南端藏海に依頼したものである。

宝性寺は幾度か移転しており、この寺跡は草創期のものと考えられている（『宝性寺小史』初瀬部；1989）。寺の歴史は寛正4年（1463）まで遡り、能登の地頭長谷部信述の末裔である信貞（貞教）が能登の穴水からこの地に移り、長谷山寶性寺を建てたことに始まるとされている。その後、天正3年（1575）には、木舟城下に移転したものの、天正大地震に被災したことが判明している。慶応2年（1866）には、木舟から現小矢部市の岡へと再び移転し、現在に至っている。このことから、塚跡は少なくとも最初に移転がなされた中世末期以降に構築されたものと推測される。

遺跡の範囲は南北40m、東西40mを測るが、今回の調査では遺物は採集されなかった。

②下老子笹川遺跡（遺跡番号422072）：範囲変更

全長1.9kmを測る木舟遺跡は、福岡町と高岡市にまたがって所在している。昭和47年（1972）の「富山県遺跡地図」では、福岡町側として4箇所、高岡市側でも4箇所が遺跡ポイントとして把握されている。この時は、「下老子遺跡」「下老子上田遺跡」「笹川道尻遺跡」「笹川遺跡」「笹川福田遺跡」「笹川木広遺跡」として登録されている。ところが、能越自動車道の建設に伴う分布調査（福岡町側平成3年・高岡市側平成5年）と続いて行なわれた試掘調査（福岡町側平成4年・高岡市側平成6年）によって、これらの遺跡がまとまりを持ちながら両市町にまたがっていることが確認され、新たに下老子笹川遺跡として周知されることとなった。

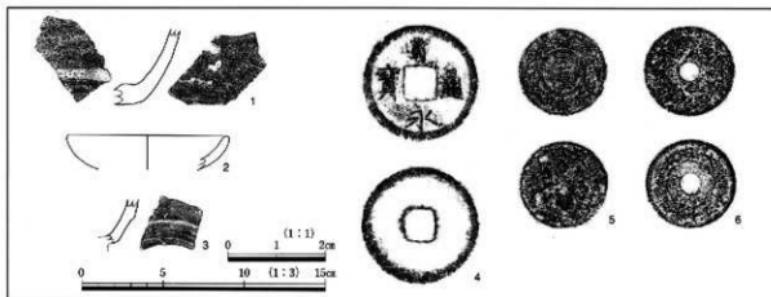
平成7年から平成10年にかけて実施された本調査は、延べ225,428m²にも及ぶ大規模なもので、調査の結果、弥生時代後期後半～終末期のムラの跡や弥生時代後期～古墳時代中期までの幅をもつ水田跡を県内で初めて確認している。特に弥生時代の遺構では、住居内での玉作り痕跡や焼失住居、周溝をもつ建物や平地建物、堅穴住居が検出されており注目される。さらに、縄文時代晚期の集落跡や近世から近代の建物群が確認され、当地域の歴史を理解する上で重要な考古学上の成果が挙がっている。

一方、平成9年に町教委によって実施された個人住宅建築に伴う小規模な調査では、福島県天王山遺跡の土器を標式とする天王山式系統の土器がまとまって出土している。

調査前と比べ、遺跡の範囲は南東方向に300m拡大したほか、北と西に若干拡大しており、南北約950m、東西約650mを測る（福岡町域分）。遺跡の立地は北にむかって緩やかに傾斜しており、それは大正10年の地形でも同様である。現在直線的に流れる荒又川は、当時蛇行して流れていたが、現在の集落がある場所はやや高台に位置しており、この部分の遺跡境界は明確である。一方北側についても、これまで下老子北遺跡として本遺跡に隣接していた場所が、数度の試掘調査結果と今回の分布調査結果より遺跡の遺存が認められないと判断されることから、境界はほぼ明らかとなっている。

採集遺物は縄文5点、弥生93点、古代19点、中世5点、近世以降45点で167点を数える。1は須恵器の杯身で8世紀代のもの、2は中世土師器で16世紀後半頃、3は瀬戸美濃の天目茶碗である。4～6は古錢で、4は寛永通宝でも新寛永とされるもので17世紀末～18世紀末に鋳造されたものである。5は大正5年初鋳の5厘青銅貨、6は大正11年初鋳の小型5銭白銅貨である。縄文土器は細片のため時期を特定できないが、発掘調査の成果から晩期後半に属するものと考えられる。弥生土器についても同様で、刷毛目など調整痕のあるものや赤彩されたものがみられる。図示できるほどの大きさのものは採集できなかったが、弥生時代後期～終末期におさまる時期のものと考えられる。古代須恵器・土師器がみられるが、少量である。中世は図示したもののはか、珠洲、青磁がある。近世以降では越中瀬戸の皿と18世紀代の肥前焼器が目立って採集された。

遺物の散布状況をみると、遺跡内全域において広く表採されているが、特に高岡市との境に至る遺跡南東部においてまとまって採集できたことからこの方向に遺跡範囲を拡大している。



第4図 遺物実測図(1)(1/3) ※4～6は1/1

③江尻遺跡（遺跡番号422073）：範囲変更

能越自動車道の建設に伴い、平成3年に実施された分布調査によって発見された遺跡である。試掘調査は平成4年に行われ、その結果を受けて平成7年に延べ22,204m²を対象とする本調査が実施された。また、平成13年には町教委によって、県道福光福岡線の拡幅に伴う本調査が実施されている。

これらの調査の結果、遺跡の主体を成す時期は弥生時代後期～終末期と近世～近代であり、該期の遺構・遺物がまとまって検出されている。縄文晩期の遺物や中世の遺物は若干みられるが、大半が遺構に伴うものではない。発掘調査と旧地形を勘案すると、遺跡は亀川左岸に所在するものと考えられ、さらにその中心は現在の江尻集落が立地する微高地と重なる部分に形成されているものと推測される。弥生時代の遺物を丹念に見ていくと、水田の存在を示唆する曲柄鍬が出土しているほか、玉作りの材料である緑色凝灰岩や天王山式土器が少量ながらも出土しており、近接する下老子笹川遺跡との共通性が浮かび上がる。

調査前と比べると遺跡の範囲は減少し、南北約350m、東西約250mを測る。採集遺物は、弥生2点、近世以降10点の計12点である。このうち、近世以降の遺物については近代まで下る磁器が多い。数量的に物足りないが、これは田起こしがほとんど成されていなかったことも影響している。旧地形図をみても、遺跡東側は亀川に向かって低くなっているが、この方向に遺跡が広がることは考えられない。

一方、西側は微高地部分であり遺物こそ採集できなかったが、遺跡範囲はほぼ旧状のとおりとしている。

④^{かみじま}蓑島遺跡（遺跡番号422074）：変更無

江尻遺跡と同じく平成3年に分布調査、平成4年に試掘調査が行われて発見された遺跡である。平成7年には3,476m²を対象とする本調査が実施されており、繩文晩期の遺物などが出土している。しかし、遺跡の遺存状況は悪く遺構・遺物とともに希薄なものであった。

その後、長島地区で圃場整備事業の計画が持ち上がったことから、平成11年に分布調査を実施し、平成12年と平成13年に試掘調査を完了している。調査の結果、蓑島遺跡については保護措置を必要とする遺構・遺物は確認されなかっただため、遺跡範囲は縮小している。この圃場整備事業の対象地については、既に分布調査と試掘調査を実施しているため、今回の現地踏査対象から除外して当時の表採データを使用している。

遺跡の範囲は南北70m、東西90mとなっているが、これは能越自動車道の建設に伴って実施された部分である。すでに工事は完了していることから、現況は道路と化している。

⑤^{やくふくうじ}矢部宝来遺跡（遺跡番号422075）：範囲変更・名称変更（旧矢部北遺跡）

旧矢部北遺跡であるこの遺跡は、平成10年に作業場等の建設による試掘調査が実施されている。調査により、20~30cm程度堆積した古墳時代前半の遺物包含層が表土下80cmに良好に保存され、さらにその下層の遺構確認面では溝や上坑、ピットが複数検出されている。出土遺物には赤彩された高杯や「く」字口縁の甕が出土している。

新しい遺跡の範囲は、調査前より南側の範囲が拡大し南北約250m、東西約150mとなる。遺跡名称については、「北」を付近に残された小字「宝来」に変更し、より遺跡に密着するものとした。採集遺物は弥生1点、古代1点、中世2点、近世以降23点で計27点である。近世以降では、蔵骨器と考えられる硬く焼締まった土師質土器が10点ほど採集できた。遺跡内には墓地もあることから、それに関連するものと思われる。

⑥^{やべじんぐうじ}矢部神宮寺跡（遺跡番号422076）：範囲変更

現在、日尾神社境内となっている場所を中心に遺跡範囲が設定されている。第3節のI地名各説の項でも紹介しているが、中世段階において日尾神社の付近には、天正大地震に被災するまで寺院の堂塔が多く存在していたことが伝承されている。そして、地震に被災した寺院が軒並み陥没して壊滅した時も、神社の森が「浮の宮」として残ったとされており、神社が微高地に立地していたことが示唆されている。

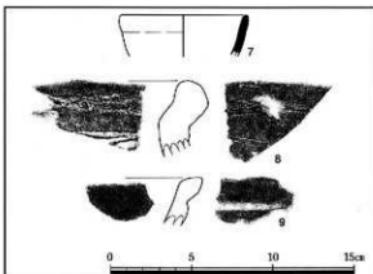
現在は平坦な水田景観の中にボツンと神社が建っているが、圃場整備前の地籍図を確認すると、周辺は谷地形部分に位置しており湧水に伴う水路が多く書き込まれている。この中で神社のある場所だけが等高線で囲まれており、微高地に立地していたことが明らかとなった。また、遺物は近世以降のものを1点採集しただけであるが、地籍図により旧境内地が現況よりも南側が広くなっていることから、この部分について遺跡範囲を拡大している。この結果、遺跡範囲は南北約100m、東西約70mとなる。

⑦矢部田中遺跡（遺跡番号422077）：範囲変更・名称変更（矢部沖野A遺跡）

調査前、この遺跡の150mほど東には矢部沖野A遺跡が存在していたが、遺跡範囲についてはこれまでに現地確認されたことがなく、その時期や性格等不明であった。そして、矢部沖野A遺跡とされていた場所では、分布調査時も遺物が1点も採集されなかった。ところが、同一の等高線上にのる西側では、比較的まとまって遺物が採集された。このため、遺跡の場所を隣接する遺物採集地点に変更し、名称についても「沖野A」ではなく、付近の小字である「田中」を採用して矢部田中遺跡とした。

新たな遺跡の範囲は、南北約110m、東西約250mとなる。採集された遺物は、弥生2点、古代5点、中世3点、近世12点で計22点である。図示できた遺物は3点で、7が8世紀代と考えられる須恵器杯身、8が珠洲の甕の口縁部で15世紀前半～中頃のV期に比定される。9は近世のもので、鍋か鉢と考えられる在地の土師質土器である。古代土師器、中世土師器も採集されている。

遺物の散布状況をみると、採集できる水田では特定の時期に偏らず採集できる傾向があり、複数の遺構面が存在する可能性も考えられる。

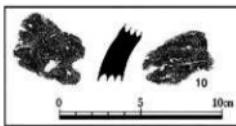


第5図 遺物実測図(2)(1/3)

⑧矢部仲野遺跡（遺跡番号422078）：範囲変更・名称変更（旧矢部沖野B遺跡）

本遺跡についても、矢部沖野B遺跡という旧称が示すとおり調査前まで不明事項の多い遺跡であった。矢部田中遺跡と同様に、旧矢部沖野B遺跡内では遺物が全く採集されず、その40mほど西で古代と近世の遺物が採集されたことから遺跡の位置を変更した。また、名称についても「沖野B」ではなく小字「仲野」を採用した。

変更された結果、遺跡の範囲は南北200m、東西130mとなる。採集された遺物は、古代5点、近世以降3点で計8点である。このうち古代の遺物は須恵器のみであり、遺跡中央より北側で採集されている。図示し得たものは、10の須恵器頸部が1点のみである。



第6図 遺物実測図(3)(1/3)

⑨下老子北遺跡（遺跡番号422089）：抹消

本遺跡は、平成8年に実施された試掘調査によって確認された遺跡である。しかし、平成14・15年度に相次いで遺跡内において住宅の建築工事が実施され、現在、遺跡の大部分は住宅地に姿を変えてしまっている。

さて、住宅建築に伴って工事に先立つ試掘調査を実施したところ、保護措置を講じるべき遺構や遺物は確認されていない。発見の経緯となった平成8年の試掘調査では、出土遺物は近世陶磁2点のみであるが、掘立柱建物の柱穴が検出されている。ただ、その柱穴の並びは明瞭なものではなく、遺構密度も低いものであった。このため遺構周辺の表土を面的に剥いで記録をとったが、地山となる砂疊層まで圃場整備の削平が及んでおり、遺存状況は極めて悪く遺跡の時期の特定も明確ではなかった。

今回の分布調査においても、近世以降の遺物が少量採集されたにとどまっている。また、隣接する

下老子笛川遺跡と本遺跡は、1m程の高さをもつ段丘崖によって区切られている。これらのことから判断すると、本遺跡はすでにその大半が失われているものと考えられ、遺跡登録を抹消することとした。

⑩上裏中田遺跡（遺跡番号422091）：範囲変更

県道横越大滝線の道路改良工事に伴い、平成10年に実施した分布調査によって確認された遺跡である。分布調査時には、古代と中世、近世以降の遺物が採集されている。平成11年には道路用地部分を対象に試掘調査を実施しているが、保護措置を要すべき遺構と遺物は確認されなかった。この時の試掘結果に基づいて、遺跡の範囲は現在も八幡宮や集落が延びる微高地上に絞り込んでいる。旧地籍図によれば、八幡宮の南側にある段丘崖がカーブしている部分に岸渡川へと合流する流路が記されている。

今回の分布調査では、以前に分布調査を実施していなかった集落内を歩いたが、採集できたのは近世以降のものばかりであった。ただ、県道福光福岡線を挟んだ北側部分で中世の珠洲や瀬戸内海の破片が採集されたことからこの方向に遺跡範囲を拡大した。新たに遺跡範囲とした場所から100m程北には、先に紹介した宝性寺塚が存在しており何らかの関連が伺われる。

新しい遺跡の範囲は南北約550m、東西約100mほどとなる。採集された遺物は、中世2点、近世以降のものが19点で計21点となる。

⑪蓑島前川原遺跡（遺跡番号422097）：変更無

蓑島地区で計画された圃場整備事業に伴い平成11年に実施された分布調査により発見された遺跡で、旧称はHM-02遺跡である。平成12年度に実施された試掘調査では、桑山石でできた粉引き臼のほか15世紀代を主体とする中世土師器や珠洲が出土している。また、石組井戸のほか多くの柱根を伴う柱穴がまとまって検出されており、小規模な集落遺跡が存在しているものと思われる。前回、詳細な分布調査を実施していることから、今回の分布調査対象から除外しており遺跡内容の変更はない。

⑫土倉兵衛館跡（遺跡番号422102）：変更無

この遺跡については、1909年の『富山県西砺波郡紀要』にその名がみられるのみで、実態は不明である。同書によれば、「下老子村領の南端に小高地あり土倉兵衛の古城跡なりと称す」とある。地元の伝承によれば、その地は現在の諏訪社の境内地付近とされている。しかしながら、隣接地での試掘調査では遺構や遺物は確認されておらず、遺物の散布も認められなかった。50m程南下した場所を走る能越道建設に伴う発掘調査の際も、検出された遺構は近世～近代のものが主体を成し館との関連性をうかがえるものは確認されておらず、依然としてその詳細は不明である。

⑬二歩遺跡（遺跡番号422105）：新規

新規の遺跡で南北約200m、東西約150mがその範囲となる。採集された遺物は、古代6点、近世以降6点の計12点である。古代は須恵器1点と土師器5点であるが、細片のため図化は不可能で、器種や時期を特定することはできない。地形からみるとまだ東に広がることが想定されるが、東側は高岡市の行政区域となるため福岡町域のみで遺跡範囲とした。250m程北には下老子笛川遺跡があるが、

遺跡の散布状況は断絶を示しており、また採集遺物にも弥生時代のものが確認されなかったため、新規の遺跡とした。名称については、周辺地域が旧二歩村に該当することによる。

II 小 結

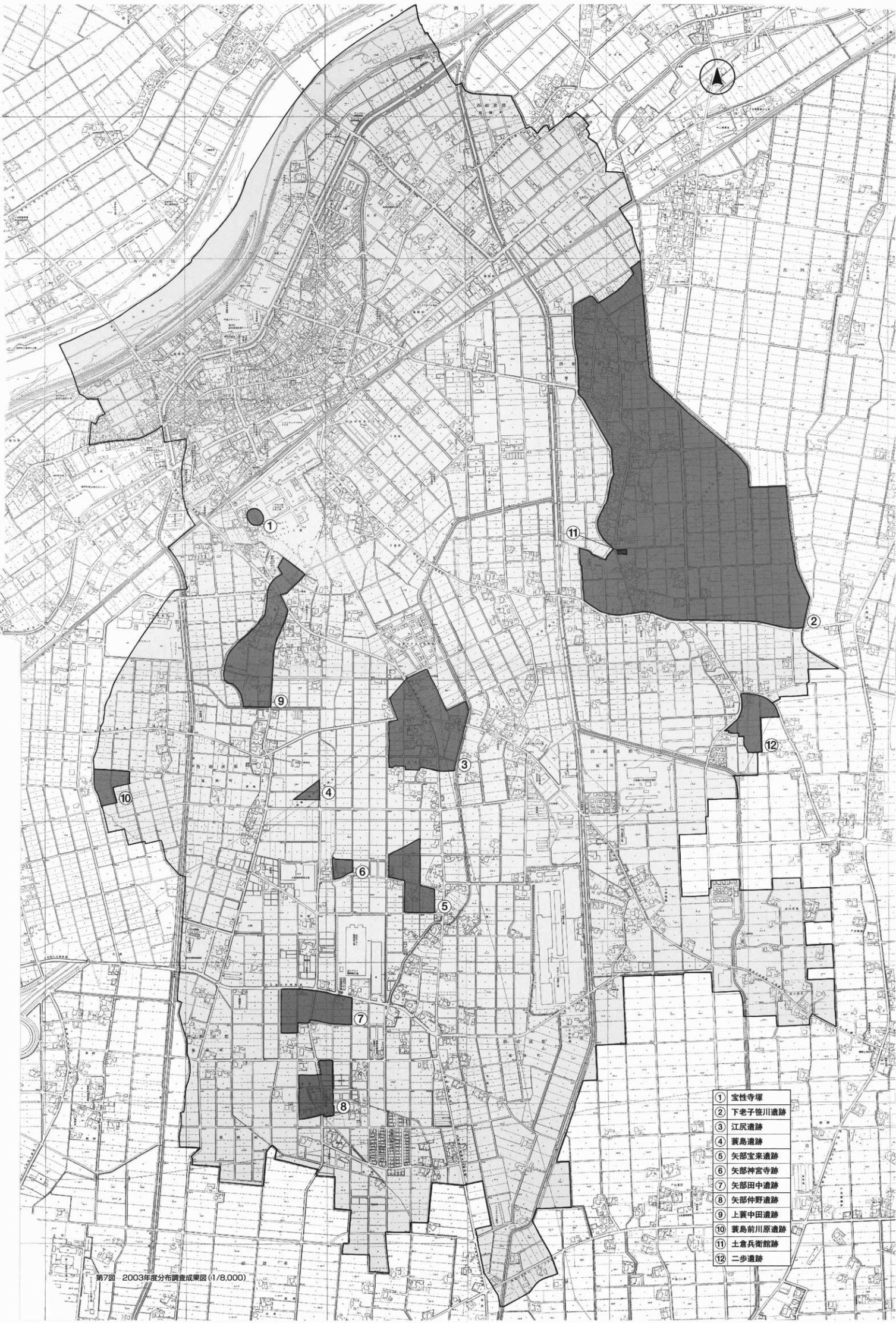
昨年度と本年の2ヵ年により、「川東」である小矢部川右岸地域の詳細分布調査が完了した。能越自動車道の開通は、県道・町道等の道路整備を急速に進行させており、その結果として居住者が増加する当地区は、開発行為の集中箇所でもある。精度の高い遺跡地図を早急に必要とするこの場所の分布調査を完了することができ、今後の埋蔵文化財保護と開発行為はより円滑に進むことが期待される。

さて、今年度の調査の特徴は、既存の埋蔵文化財包蔵地の範囲と場所を確定させることであった。新規の遺跡が二歩遺跡だけであるというのは淋しい気がするが、伝承的意味合いを有した遺跡について、遺物採集地点であるといった一定の存在根拠を与えることができた意味は大きい。楕円形の遺跡範囲が記入された旧来の遺跡地図では、試掘調査の要否などでその運用に支障を来すこともあり、その都度現地で分布調査を行なっていたが、今後は地図上の判断が可能となった。

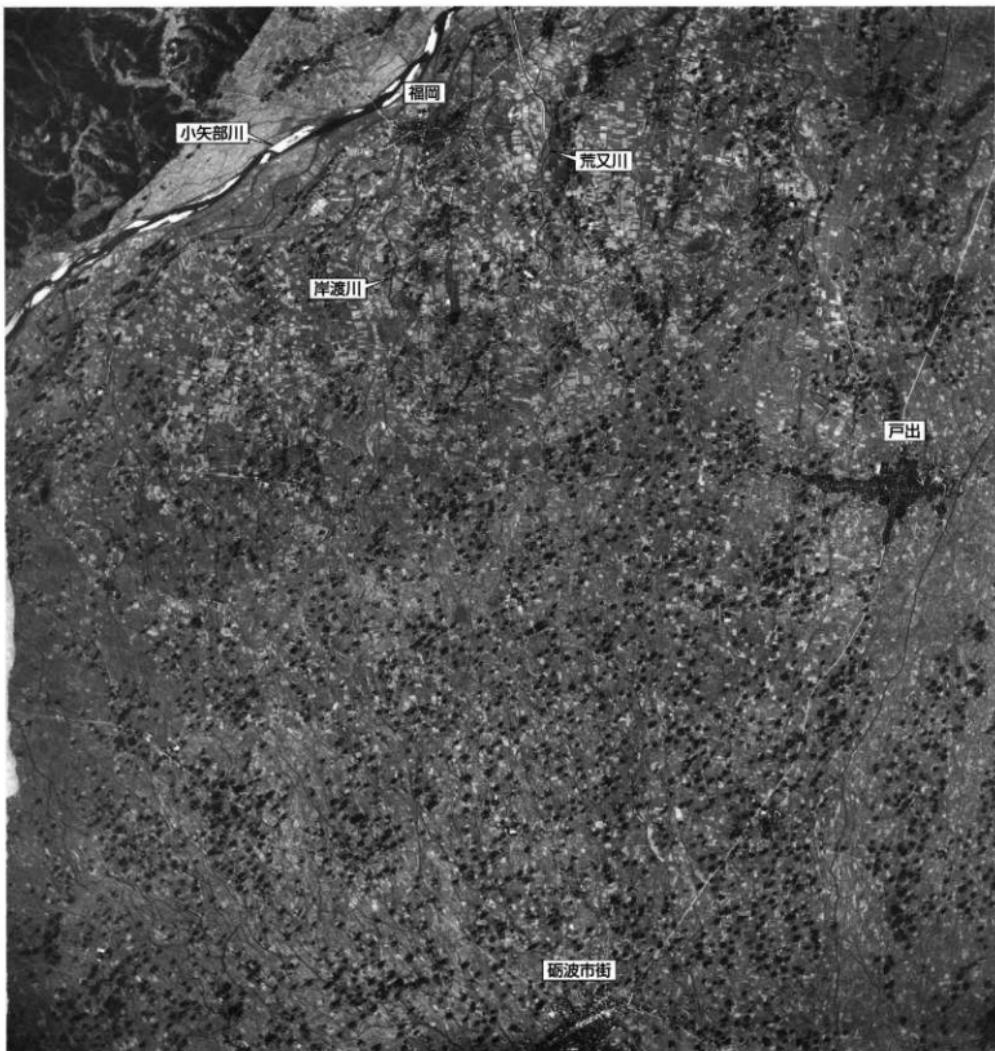
ところで、昨年度の大滝地区での時代別採集遺物と本年度の福岡・山王地区での時代別採集遺物を比較すると、前者は古代が他を圧倒するかたちで存在し、中世の遺物も一定量を占めているのに対して、後者では、近世以降が他を圧倒し弥生時代の遺物がそれに次ぐ結果となっている。これは、石名田木舟遺跡・木舟城跡を有する大滝地区と下老子笹川遺跡を有する山王地区の差異を如実に反映しているものといえる。近世以降の遺物が共に高い数量比を占め、遺跡外にも広く散布している点を考慮するなら、地区レベルにおける主要遺跡は中世段階まで一定の棲み分けがなされるのに対して、近世以降になると人口増加や新田開発によって広範囲に集落が展開していったものと読み取ることも可能かもしれない。本年度以降の調査データを蓄積し、検討課題としたい。

第2表 調査遺跡一覧

遺跡番号	名 称	所在地	種 別	時 代	現 況	備 考
① 422071	宝性寺塚	福岡町上箕字古町	その他	不明	集落	変更無し
② 422072	下老子笹川遺跡	福岡町下老子 高岡市笹川	集 落	縄文・弥生・古墳・古代 中世・近世	集落・道路 耕作地	範囲変更
③ 422073	江尻遺跡	福岡町江尻	城 館	縄文・弥生・古墳・中世 近世	集落・道路 耕作地	範囲変更
④ 422074	蓑島遺跡	福岡町蓑島	集 落	縄文・弥生・古墳・中世 近世	道路	変更無し
⑤ 422075	矢部宝来遺跡	福岡町矢部	散布地	弥生・古墳・古代・中世 近世	集落・耕作地	範囲・名称変更
⑥ 422076	矢部神宮寺跡	福岡町矢部	散布地	近世	集落	範囲変更
⑦ 422077	矢部田中遺跡	福岡町矢部	散布地	弥生・古代・中世・近世	耕作地	範囲・名称変更
⑧ 422078	矢部仲野遺跡	福岡町矢部	散布地	古代・近世	集落	範囲・名称変更
⑨ 422089	下老子北遺跡	福岡町下老子	散布地	中世・近世	集落	抹消
⑩ 422091	上箕中田遺跡	福岡町上箕	散布地	古代・中世・近世	集落・耕作地	範囲変更
⑪ 422097	蓑島前川原遺跡	福岡町蓑島	散布地	弥生・中世・近世	耕作地	変更無し
⑫ 422102	土倉兵衛館跡	福岡町下老子	城 館	中世	集落	変更無し
⑬ 422105	二歩遺跡	福岡町一歩二歩	散布地	古代・近世	耕作地	新規



第7図 2003年度分布調査成果図 (1/8,000)



写真図版1 航空写真(1) ※1947年撮影



写真図版2 航空写真(2) ※1946年撮影



写真図版3 遺跡写真(1) 上段：下老子笠川遺跡（北から）、下段：下老子笠川遺跡（南から）



写真図版4 遺跡写真(2) 上段：江尻遺跡、下段：矢部宝来遺跡

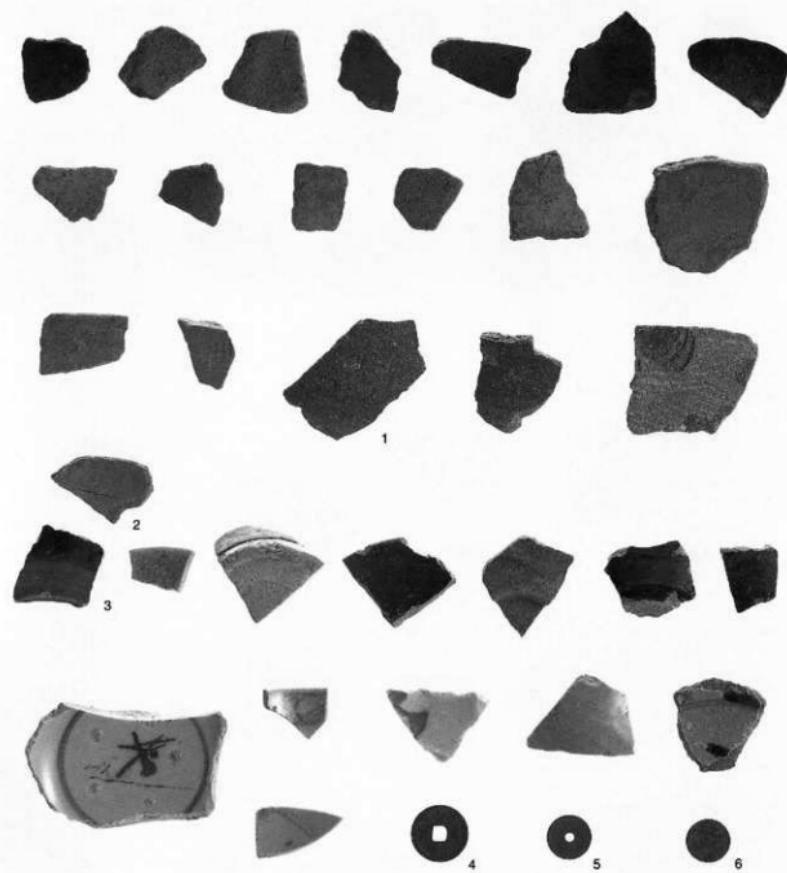


写真図版5 遺跡写真(3) 上段：矢部田中遺跡、下段：矢部仲野遺跡



写真図版6 遺跡写真(4) 上段：上表中田遺跡、下段：二歩遺跡

下老子笛川遺跡

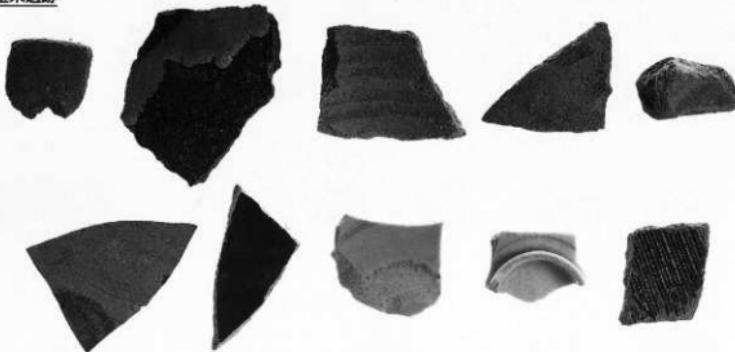


江尻遺跡

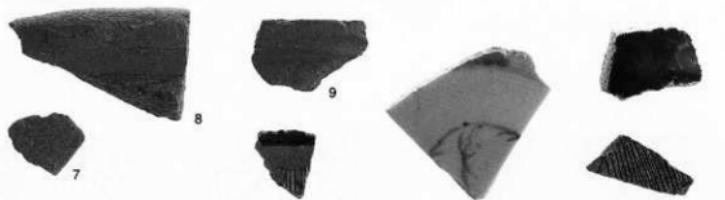


写真図版7 表採遺物 俯瞰写真(1) ※縮尺約1/2

矢部宝来遺跡



矢部田中遺跡



矢部仲野遺跡



上表中田遺跡



二歩遺跡



報告書抄録

ふりがな	とやまけん ふくおかまち まいぞうぶんかざいぶんぶちょうさほうこくに							
書名	富山県福岡町埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ							
シリーズ名	福岡町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	14							
編著者名	栗山雅夫							
編集・発行機関	福岡町教育委員会							
所在地	〒939-0132 富山県西砺波郡福岡町大滝44番地 ☎0766-64-5333							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
所 収 遺 跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
町内遺跡	福岡町地内	164224	—	36度 42分 00秒	136度 55分 20秒	20030312 20030331	—	—
所 収 遺 跡	種 別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項	
町内遺跡	—	縄文時代・弥生時代 古代・中世・近世	—	—	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、珠洲焼・中世上師器、瀬戸美濃・越前・八尾・白磁・青磁、錢貨・越中瀬戸・肥前陶磁			

富山県 福岡町
埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ

発行日 平成16年3月31日

編集・発行 福岡町教育委員会

〒939-0132

富山県西砺波郡福岡町大滝44番地

TEL0766-64-5333

印 刷 ヨシダ印刷株式会社

